

つれづれなるままに 第20号

令和2年2月21日（金）発行



校長 深谷 浩一

ボランティアって何だろう！（6）（最終回）

～ボランティアを部活動で！～

22年前に本校に赴任し、ゴミだらけの大洗海岸に失望し、400人以上の県内のALTや生徒を動員してボランティア活動を展開したトッド先生の考え方を紹介することからスタートしたこのシリーズもいよいよ佳境を迎えました。

最終回の今回は、今年度本校に赴任したばかりのジョージ先生に対して、22年前にトッド先生に対して行った同じ質問を行い、その回答を比べてみたいと思います。「A」にはジョージ先生の回答を、（参考：Todd）には、22年前に行ったインタビューでのトッド先生の回答を、そして、[筆者のコメント]欄には、筆者としての私のコメントを記載しておきます。

Q：あなたは高校時代に何らかのボランティア活動の経験がありますか？

A：イギリスには、「エジンバラ公爵賞」を獲得するという特別なチャレンジ企画があります。14歳から24歳までの若者が参加できる企画で年間30万人が参加しています。「探検」「技能習得」「スポーツ」「ボランティア活動」の4つのセクションに取り組むことになります。つまり、年間30万人の若者がこの国のどこかでボランティア活動を行っていることになるのです。いろいろな活動があって、チャリティショップや図書館で働く人もいれば、放課後子供たちに勉強を教えている人もいます。また、施設で働いている人や子供たちにスポーツを教えている人もいます。こうした経験はとても役に立ちますし、何より楽しいのです。

（参考：Todd）

私の卒業した高校では、卒業の必須条件として「3年生用研究課題」に取り組むことが義務付けられていました。「3年生用研究課題」とは、学年として地域社会の中で取り組むべき課題を一つ選び、それに取り組むことです。・・・私たちの場合は、学校近くのコロラド州立公園内のゴミ拾いをするものでした。

[筆者のコメント]

アメリカでもイギリスでも高校生のボランティア活動は推奨されており、実際多くの高校生が在学中にボランティア活動の経験があるようです。アメリカのトッド先生の学校ではすべての3年生に取り組むべき「3年生用研究課題」が与えられ、それが卒業のための必須課題となっています。イギリスのジョージ先生の学校では特に強制はしていませんが、多くの生徒が「エジンバラ公爵賞」に取り組み、「ボランティア活動」の領域では、学校以外の施設等で希望に応じたボランティア活動を「楽しみながら」行っているとのことでした。

この「楽しみながら」というのが一つのポイントで、単なる「苦役」の労働であつたら「また、やってみよう！」とは誰も思わないかも知れないからです。

Q：学生時代にボランティア活動の重要性について教えるような授業がありましたか。もしあれば、それはどんな授業でしたか。

A：学校では、ボランティア活動を強制されることはありませんでしたが、先に紹介した「エジンバラ公爵賞」の取組に参加するように強く勧められたことはあります。ボランティア活動を行うことが将来自分たちにとっていかに役に立つ経験になるかについて、何回も集会が開かれました。私の学校では「探検」を2回もやりましたが、これは決して普通のことではなく、すべての学校でやっているわけでもないのです。

私が通った学校では、クラブ活動の一部として、ボランティア活動を行う機会を提供してくれました。これも稀なことではありましたが。

校外での活動では、多くの生徒はスカウトに参加しています。46万人のメンバーを有し、ボランティア活動も強く勧めています。事実、スカウトに関わっている11万人の大人たちはすべてボランティアなのです。

また、別な選択肢もあって、「連合士官候補生部隊」(Combined Cadet Force)、略して「CCF」というのですが、ここでは、生徒たちは軍隊の規律やリーダーシップを学ぶことができます。陸軍、海軍、空軍のいずれかに参加することになります。

(参考：Todd)

私の高校では、ボランティア活動の重要性に関する特別な授業はありませんでしたが、「3年生用研究課題」の準備に際して、その問題を話し合うために集会所で何回か学年集会を開きました。・・・卒業するためには「3年生用研究課題」に取り組むことが求められました。というのも高校時代にボランティア活動の経験をもつ生徒を求める大学や会社は年々増えているからです。私たちの高校では卒業の必須要件として、研究課題に取り組む日を課していましたが、もし私たちが大学や就職の志願にあたって競争力をつけたいと思えば、自分自身でそれ以上のことをするべきだというのが学校の考えです。推薦された活動は多岐にわたっていましたが、どんな活動を選ぶかは基本的に生徒に任されていました。学校は私たちにもできそうな何十ものアイデアを載せたリストを作って提供してくれました。

[筆者のコメント]

ジョージ先生によると、イギリスではボランティア活動が強制されることはなかったようですが、とても大切な活動であるという認識のもとに、「強く勧められる」ことはあったようです。また、校外の活動としては、ボーイ・スカウト等の活動は一般的で多くの生徒が参加しており、大人になっても、今度は指導者としてスカウト活動に参加しているようです。ジョージ先生は、生徒にボランティア活動を行わせるには、「機会」と「動機」が大切であると述べています。そして、それを行う場は、「部活動」が最も適切であると言っています。

トッド先生の学校では、高校時代にボランティア活動の経験をもつ生徒を求める大学や会社は年々増えていることから「3年生用研究課題」が卒業要件となるなど、学校としてもボランティア活動の経験は重要視しているようです。ただし、活動内容は基本的に生徒の選択に任されているようです。

Q：近年、日本の文部省（現文部科学省）は他人への思いやりの気持ちを育てるために高校でのボランティア活動の重要性を強調しています。しかしながら、多くの学校では大学の入学試験に合格するための知識や技術を生徒に教えることだけに躍起になっているというのが現実です。・・・このような状況をいかがお考えですか。

A：日本における入学試験は高く評価されていて、社会も入試を中心に廻っているというのが現実でしょう。私も生徒たちが前もって試験問題を渡され、その質問に対する解答を準備してどうすればその解答を覚えているかに躍起になっているかを見たことがあります。しかし、これは正しい学習法ではありません。これは、イギリスでは、「カンニング」と見なされるような勉強法ですが、それが日本では試験で高得点を取ることがどれほど大切かを示してもいるのです。

こんな理由から、私は先生方の中にはボランティア活動を煩わしくて不必要なものとする人もいることはよくわかります。実際、試験や部活動やアルバイトの合間に生徒たちにはボランティア活動なんてやる暇なんてありますか。たとえ、その時間があつたとしてもどうしてボランティア活動をする必要があるのでしょうか。それは（１）機会、と（２）動機の問題です。

もしあなたが生徒にボランティア活動の「機会」を与えようとしたら、最良の答えはその活動を部活動にすることです。こうすることで生徒たちは試験とかアルバイトに煩わされることなく地域社会に貢献することができるのです。つまり、生徒たちはボランティア活動を行う時間を見出す心配がなくなるわけです。

ボランティア活動を行う「動機」を見つけることはむしろ簡単です。ボランティア活動は生徒の経歴にとっては素晴らしいものだし、学校としては、「エジンバラ公爵賞」に似たようなものを取り入れることもできるからです。

ボランティア活動の本当の価値はその活動を経験することなのです。ガーデニングの仕事からは将来その道で仕事を行うための貴重な技術を学ぶことができますし、小学校で働く経験をすれば教師になるための鋭い洞察力を身に付けることができます。いずれにせよ、新しい人に出会うことは将来仕事を行う上で大切なことなのです。

部活動としてボランティア活動をうまく行えば、生徒にとっても学校にとっても素晴らしい機会となるでしょう。

(参考 : Todd)

まず日本の高校生や先生方ボランティア活動に参加しないことについて、率直な意見を言わせていただきます。日本には他人より自分のことばかり考える自己中心的な個人を生み出すような社会的な土壌があります。この国では入学試験に合格することに重点が置かれているので、生徒たちは価値あること、あるいは自分たちの教育（の目標）は試験で合格することだけだと考えるように洗脳されてしまうのです。彼らも彼らを教える先生方も社会的な責任を学ぶことの教育上の重要性に気づきません。そして「お前は試験に合格しなければならない！」と日々繰り返し繰り返し頭の中にたたき込まれます。が、「お前は責任ある大人になるにはどうしたらいいかを学ぶ必要がある。」とは言われたいのです。

[筆者のコメント]

ジョージ先生は、日本の先生が普段行っている、「入試問題を使った解法演習」を「カンニング」に等しい勉強法だと言っています。これまでこのような発想は私にはありませんでしたが、確かに言われてみれば、自分で解法を考えもせず、「正解」だけを見てそれをただ覚えるだけでは、「カンニング」に等しい行為と言われても仕方ないかも知れません。

また、ジョージ先生は先生方の中にボランティア活動を煩わしくて不必要なものとする人がいることについて理解を示しています。「実際に、試験勉強、部活動、アルバイトの合間にボランティア活動を行う暇があるのか」と。さらに、「その必要性が本当にあるのか」と。

一方、トッド先生は、日本の高校生や先生方がボランティア活動に参加しないことについて、極めて攻撃的でした。「日本には他人より自分のことばかり考える自己中心的な個人を生み出すような社会的な土壌」があつて、「入学試験に合格することに

重点が置かれているので、生徒たちは価値あること、あるいは自分たちの教育（の目標）は試験で合格することだけだと考えるように洗脳されており、「彼らも彼らを教える先生方も社会的な責任を学ぶことの教育上の重要性に気づいていない」と。

攻撃的であると同時に挑発的でもあったこの意見に対して、22年前の当時は、なぜかそれほどの怒りは感じず、むしろ爽快感すら覚えた記憶があります。それはおそらく、トッド先生が指摘したことが「的を得ている」と直感したからかも知れません。これを読んだ生徒からも、それほど大きな反発がなかったのもたぶん同じ理由かと思われます。

Q：日本の教育にとって最も大事なことは何だと思いますか。あなたの理想を実現するためにどんなことをしたいと思いますか。また、日本の教師に期待することは？

A：生徒たちはただちにボランティア活動を行うよう強制されるべきではありません。無理矢理ボランティア活動をさせたところで、彼らは頭にくるだけです。そのかわりに、先生方には生徒がボランティア活動を行うための動機を提供してあげてほしいのです。そうすればボランティア活動が楽しいものとなり、大人になっても続けていこうとする気持ちが芽生えてくるのです。

(参考：Todd)

日本の16歳から18歳の生徒たちは、私がこれまで見た中で最も成熟していない、幼稚な高校生です。「学力標準テスト」では高いスコアを示しても「社会参加」という点ではアメリカの12歳と同じです。アメリカの生徒たちは、麻薬、銃、強盗、妊娠といった悪い環境の中で育つため、成熟するのが早いとも言えますが、アメリカでは若くても大人（*young adults*）だと見なされているという事実も否定できません。「若い大人」と見なされているから生徒は大人の活動に参加したり、大人としての責任について学ぶことを期待されているのです。

一方、日本の高校では生徒を子供扱いにし、彼らをそのように振るまわせています。アメリカでは親が負うべき種々の責任を、日本では担任の先生が負っています。基本的に日本では、親の仕事を教師が受け継いでいるようなものです。教師はさしずめ「昼間の親」といったところでしょうか。アメリカでは、親は高校生の息子や娘に、大人のように振る舞うにはどうすればよいかを教え、教師は学校で彼らをそのように（つまり、大人として）扱うのです。あなた方は生徒をボランティア活動に参加させたいとお考えですか。そのためには、大人になる必要があります。まず、ハローキティやポケモンやプリントクラブを取り上げてください。その次に、「若い大人」として振る舞うことを教えてあげるのです。・・・

[筆者のコメント]

ジョージ先生は、ボランティア活動は、強制して行わせるものでないと言います。そして、「生徒にボランティア活動を行う動機を提供してほしい。」と先生方をお願いしています。

一方トッド先生は、「日本の高校では生徒を子供扱いにし、彼らをそのように振る舞わせている」ことそのものが誤りなので、「親は高校生の息子や娘に、大人のように振る舞うにはどうすればよいかを教え、教師は学校で彼らをそのように（つまり、大人として）扱う」べきだと強調しています。

トッド先生の授業は、今思い返せば、とてもユニークでした。「いろいろな人の英語を聞く」授業では、大統領や俳優の物真似から、インド人や中国人の英語などを自分の声で録音してきて、「これはどこの国の人か」などと生徒に問いかけたりしたこともあります。とにかく楽しい授業でしたし、思ったことは率直に発言する人でした。それがトッド先生が生徒に好かれた大きな理由かも知れません。

Q：あなたの実践報告に何か付け加えることがあれば、遠慮なく述べてください。

A：私の前任者の中には、日本の高校生は自己中心的で成熟していないからボランティア活動をしなさいのだと言った人がいますが、この意見に私はまったく賛成できません。生徒たちの優先順位が違うだけだと思うのです。人が何かをするには動機が必要だというのは世の中の現実なのです。ボランティア活動がどんなに尊いことであってもたいていの人にとってはボランティア活動を行う理由がわからないというのが現実なのです。これは日本には当てはまりませんが、イギリスでのボランティア活動は、たいてい何かほかのことの結果として現れます。履歴書のために資格を取るとか、経験を得る手段とか、あるいはただ、それをする楽しいからとか。「それをするとなんか楽しくなる」というのが目的（ゴール）ではありますが、そこまで行くには時間がかかります。たとえば、スカウトのためにボランティア活動を行っている人はたいてい昔はスカウトを行っていたのです。

部活動としてボランティア活動に取り組む場合どんなことが考えられるか、アイディアをいくつか示しておきます。

- ・ 小学校のクラブ活動のお手伝いをする
- ・ 小学校で勉強を教える
- ・ 小美玉市内の家庭でガーデニングを手伝う
- ・ ケヤキ通り沿いの空き缶を拾う
- ・ 学校の清掃を行う
- ・ 落ち葉拾いや雪かきを行う
- ・ 学校のポスターを作ったり飾り付けを行ったりする
- ・ 地元の会社でボランティア活動を行う
- ・ ソーシャルメディアを運営する
- ・ チャリティ・イベントを開催する

(参考：Todd)

日本では教育課程の一環として社会参加の仕方を学んでいないし、親もそれを子供に身につけさせることに失敗しています。さらに、教師は生徒を子供扱いし、生徒に自分で考えさせることをしていません。だから、子供っぽい習慣が一向になくならないし、社会に関心を抱いたり、大人としての社会参加の在り方に興味をもったりする生徒が育たないのです。・・・私たちが日本の高校の中に教育上欠くことのできない重要な一部として、大人の社会的な対人関係や責任感を学ぶ場の必要性を強く訴えて初めて、将来に変化を見ることができるようなのです。

[筆者のコメント]

ジョージ先生は、トッド先生の「日本の高校生は自己中心的で成熟していないからボランティア活動をしなさいのだ」という意見を完全に否定しています。ボランティア活動は、強制して行わせるものでない」として、「生徒にボランティア活動を行う動機を提供してほしい。」と先生方に呼びかけています。

一方、トッド先生は、「日本の高校では生徒を子供扱いにし、彼らをそのように振る舞わせている」ことそのものが誤りなので、「親は高校生の息子や娘に、大人のように振る舞うにはどうすればよいかを教え、教師は学校で彼らをそのように（つまり、大人として）扱う」べきだと強調しています。

現在本校では、JRC同好会がボランティア活動を担当し、地元自治体、特に小美玉市の事業には数多く参加して活躍しています。ジョージ先生の意見では、部活動として実施している本校の形態が「最良の方法」ということになるのです。（おわり）